仮面ライダーW　赤き閃光と太陽の神

ケフィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーＷ　赤き閃光と太陽の神

【Ｎコード】
Ｎ３１９３Ｕ

【作者名】
ケフィア

【あらすじ】
もしも風都のライダーの弟子で、赤き閃光のライダーの後継者で、三つ目のカブトの適合者がいたら？
主人公はある日、ライダーの力を手に入れ、化け物と戦います。
兄は天の道を行き全てを司る者、師匠は風都のハーフボイルド、知り合いは猫舌な優しい青年。
これは作者の妄想が具現化してしまった、ひどい小説？です。
嫌な人はバックで戻ってください。

月の神（前書き）

初めましてケフィアです。

今回は仮面ライダーの二次創作を書きたいと思います。

あとがきにて次回予告

月の神

？　「ウガァァァァァァァァァァァァ！」

人　「う、あうっぁあああああああああ？！」

路地裏、ある会社の帰る途中であった男は暗い路地裏で怪物に襲われていた。
緑色の虫を連想させる怪物は、かつてワームと呼ばれた、地球外生命体だった。

ワーム　「ウガァァァァァァァァァァァァ」

なぜワームが人を襲うのかと言うと、ワームは擬態するために人を襲うのだ。
……もちろんそれだけではない、容姿、記憶全てが奪われる、それがワームだった。

過去形なのはワームは絶滅し、残ったワームは人と共存する道を選んだはずだった。

しかしワームは人に襲い掛かっている。

ワーム　「ヨコセ、オマエノカラダァァァァァァァァァァァ！」

ワームに対抗する手段はあることはない、マスクドライダーシステム、対ワーム用に作られた決戦兵器であり、ワームに対抗する、手段の一つだった。
ほかにもガイアメモリ、フォンライダーシステムという、手段もあ

ったが今はその手段を持つ人間がこの場にいなかった。　ＭＲＳもＧＭもＦＲＳもすべてはある特殊な人間しか扱えない特殊兵装であり、しがない営業サラリーマンである、彼には土台無理な話なのだ。

ワームは腕を伸ばし、彼に擬態しようとする。

次の瞬間、ワームは何かにぶつかり、吹き飛ばされた。

？　「たく、せっかく人が平和にしてんのに」

気怠そうに、そうまったくやる気が皆無な声が聞こえた。

月を背に歩いてくるのは、一人の青年だった。

歳は１５か１６歳くらいの短髪の黒髪の少年が腰にベルトな様なものを巻きつけて立っていた。

その周りを青い何かが飛び回っている。

夷　「ワーム、お前らが俺たちの生活を脅かすのなら……」

青い何か……いやカブトムシのような形をした機械はかつて、ゼクターと呼ばれた、仮面ライダーになるためのツール。

夷　「この両希　夷が……いやカブトが許さない」

青い虫が夷の手に向かって飛び込んでいく。

夷がその青い……ブルーゼクターがベルトに装着される。

夷　「変身」

ゼクター　「ＨＥＮＳＨＩＮ」

ゼクターからの電子音が鳴り響いた瞬間、夷の体に装甲がまとわりつく。
青を強調した装甲、そして赤い目が光る。

仮面ライダーブルーカブトマスクドフォーム

夷　「さぁ、まだ探偵でも太陽の神でも夢も持ってない俺だが……」

ゼクターのホーン（角）をつかんで右に倒す。
すると装甲の一部が浮き上がりながら電流が体を走る。

夷　「夢を守ることはできるさ……キャストオフ」

ゼクター　「ＣＡＳＴ　ＯＦＦ」

そのまま青い装甲がはじけ飛ぶ、するとさっきよりもスマートな装甲を身にまとった夷が現れる。

そして、額のカブトホーンが上がり立ち上がった。
赤い目が一度光り、全身が青い装甲になる。　さっきよりも軽量になり超高速戦闘型になった、仮面ライダーブルーカブトライダーフォーム。

ゼクター　「ＣＨＡＮＧＥ　ＢＩＵＥ　ＢＥＥＴＬＥ」

ゼクターからの電子音が終わり、ライダーフォームとなった夷は右手を腰のスイッチに手を伸ばす。

夷　「速攻で終わらせる、クロックアップ」

ゼクター　「ＣＬＯＣＫ　ＵＰ」

ゼクターからの電子音が鳴り響いた瞬間、夷は消えた。

ワーム　「ギュァァァァァァァァァ？！」

突然ワームが殴られたように吹き飛ぶ、次の瞬間さらに吹き飛ぶ。

ゼクター　「ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ」

電子音が鳴った瞬間、夷の姿が現れる。
そして、夷は右手でゼクターホーンをつかみ、左手でゼクターの側面についてある、ボタンを押す。

夷　「これで決めるぞ？」

ゼクター　「ＯＷＮ，ＴＷＯ，ＴＨＲＥＥ」

夷はゼクターの三つのスイッチを押していくと電子音が鳴り響く。
そしてゼクターのホーンを左に倒し、一度マスクドフォームの位置に戻し、一気に右に倒す。

ゼクター　「ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ」

電子音が鳴り、ゼクターから電流が流れ、青いカブトホーンに流れ込む。
そのまま、右足に電流が流れる。

夷　「ライダーキック」

ワームは立ち上がり、そのまま夷に向かって走り出す。
夷は後ろを向き、右足に力を込める。

ワームが夷を殴ろうとした瞬間、夷が勢いよく前に向きながら回し蹴りを叩き込む。

夷　「せいやぁあああああああああああああああああ！！」

ワーム　「グギャァアアアアアアアアアアアアアア！」

ワームに当たった右足の電流が一瞬だけ、ワームの体を駆け巡り、ワームは爆発した。

夷　「なんでワームが？」

夷はすでにゼクターを外しており、ライダーになってはいなかった。

夷　「なにが起こってるんだ？」

両希　夷、彼の戦いはいったん1年前に戻る。

まだ夷が二代目のSとEだったころの話。
赤き閃光になり、兄の秘密を知ったり、記憶を取り戻すためにいろいろとしたあのころに……

一人の少年が三つの仮面ライダーになった、あの日。

月の神（後書き）

次回予告

夷　「来たよー、たっくん」

クリーニング屋の猫舌

巧　「ちょ、お前、俺が猫舌って知ってるだろうが？！」

現れる進化した人類

オルフェノク　「ファイズがいない今なら、貴様を殺せる！」

巧　「なんでオルフェノクが！？」

夷　「たっくん！」

蘇る、赤き閃光

夷　「やってやるよ、俺が……今日から555（ファイズ）だ！」

ファイズフォン　「5、5、5」

蘇るか？　ファイズ！

ファイズフォン　「STANDING　BY」

夷　「変身」

ファイズフォン　「CONPLETE」

猫舌のクリーニング屋（前書き）

はい、今回はあの猫舌青年と会います。

そして……？

猫舌のクリーニング屋

？　「さぁ、そのベルトを渡してもらおうか」

夷　「く、くそ！」

？　「逃げろって！」

夷は今ピンチであった、まるで猫の姿をした灰色の何かに追われていた。
夷の隣には青いエプロンを着た青年が一人立っていた。

夷　「だって、た、たっくんはどうするんだよ！」

たっくん？　「たっくん言うな！　俺は巧だ、啓太郎みたく言うな！」

巧と呼ばれた青年は大声で否定する、どうやらそのあだ名で呼ばれるのが嫌なようだ。
夷は手に持っている、アタッシュケースを握りしめ化け物を睨めつける。

夷　「天にぃ、ここまで見たいだよ……、ひよりねぇをよろしく」

巧　「バカ言うな！」（くそ……俺がベルトを使えれば！）

なぜ二人がこうなっているかは三十分前に戻る。

―――――――――三十分前

夷「たっくーーーーーん、洗濯よろしく！」

両希　夷はまだただの十五歳の少年だった頃の話。　兄である天道総司にクリーニング屋に洗濯物を届けてに行った夷、なぜ苗字が違う人間が兄なのかは後々に言うが、とりあえずは普通の少年だった。

巧　「うっせーぞ夷！　今行くから待ってろ」

夷が呼ぶと出てきたのは、青いエプロンをつけた目つきが悪い男だった。

乾　巧と言う青年で夷があったのは三か月前だった。

夷　「いつも悪いね、はいお礼にお汁粉だよ」

巧　「お前……俺が猫舌って知ってるだろ！」

夷が持っているのはアツアツのお汁粉、しかし巧は猫舌で熱いものが食べれないのだ。
夷は機会があればそれをネタとしていじっているが……

巧　「たく、まあいいさ。　ほら洗濯物出せ」

夷　「はいはい、あ、天にぃが今度食事にこいって言ってたよ」

夷の兄、天道総司、料理の腕もケンカの腕も最高級の男であり、超

俺様主義な奴だが、妹と夷にはめちゃくちゃ甘い、夷の学校の運動会に自作の応援幕を持っておくほどである。

しかし能力はいいので、食事処、天の道のシェフであり食通である。

巧　「あいつが？　……大丈夫だよな？」

そういいながら奥に戻っていく巧、夷は椅子に座ってテレビの電気をつける。

アナウンサー　「えー、次ですが株式会社スマートブレインが倒産しました、原因は非合法の実験を行っていたことに――」

夷　「ああ、ついにつぶれたのか」

スマートブレイン、様々な商品で一時は世界一の会社だったが社長が入れ替わった、その何か月後に社長が失踪、それが原因か株価が大暴落。

夷　「そういえば、木場さんに真理さん、草加さんは元気にやってるだろうか？」

夷は今はいない、このクリーニング屋の店員を思い出す。

後は啓太郎という青年も居たが、草加以外は全員今は新婚旅行である。

啓太郎は長田結花と結ばれ、木場は真理の強烈アタックに陥落した。

草加は保育園で働きながらそこに働いている女性といい関係だそうだ。

なので独り身の巧がクリーニング屋を切り盛りしている、ちなみに帰りはあと三日だそうだ。

夷　「ハァ、俺も彼女がほしいなぁ」

夷は今まで彼女など作ったことがなかった、それまで女というものに興味がなかった（ちなみにその手の知識は姉であるひよりに教えてもらった、兄である天道は教えなかった）

しかし、結婚式で幸せそうな４人を見てうらやましかった、夷は今年こそ彼女を作ると決めていた。

……夷は気付いていないが中学校では告白をされたことがあるが、その手の知識がなくそのフラグを無意識に破壊していた、どこぞの世界の破壊者真っ青なくらいである。

夷　「（あの時はやっちまったなぁ、しゃべりにくいし……名前は確か、神崎　愛衣だっけ？）」

巧　「おい、終わったぞ？」

夷　「って、もう？！」

巧　「何言っているんだ？　もう二十分は立ってるぞ？」

夷　「そ、そうですか」

そういって夷は立ち上がろうとするが……

？　「失礼するよ、ファイズ」

すると、後ろからかなりの高齢の男が入って来た。

巧　「……てめぇ、まさか」

？　「そのまさかだよ、乾巧、ファイズを持ちし者よ」

すると男が一瞬光ったと思ったら、体が変化していた。　灰色の体、猫を連想させる姿……かつて人類と種の生き残りをかけて戦ったオルフェノクだった。

オルフェノク　「さぁ、ファイズのベルトはどこですか？」

夷　「な、な？！」

巧　「くそ！　夷、こっちだ！」

巧は驚いている夷の腕をつかむと裏口に向かって走る、その手にはアタッシュケースが握られていた。

最初に戻る――――――――

巧　「くそ！」

オルフェノク　「ふ、変身できないお前など怖くなどない、くらえ！」

オルフェノクは巧向かって、その鋭い爪で攻撃したが巧に当たる前に夷が投げたアタッシュケースに当たり、その中身をぶちまけながら、巧を守った。

夷　「へへ、どうだい。　……ってベルトと携帯？　なんでこんなものが？」

オルフェノク　「それをヨコセぇえええええええええええ！」

オルフェノクは絶叫しながら夷につっこむが横からの巧のタックルをくらい、横に転がる。
巧はタックルした状態からそのまま地面に転がり、衝撃を殺す。

巧　「く、しかたない！　夷、そのベルトをつけろ！」

夷　「こうかな？」

意外とフィットしたベルトに驚きながらも携帯を開くと、画面があるはずの液晶画面に数字が書かれていた。

夷　「な、なんじゃこりゃぁあああああああああああ？！」

巧　「携帯の５のボタンを三回押して……」

夷は素早く、５のボタンを三回押す。

ファイズフォン　「５、５、５」

携帯のボタンを押すと電子音がなる、それに興奮する夷だったが次

の指示を待つ。

巧　「携帯のＥＮＴＥＲと書いてあるところを押して、携帯を閉じろ！」

夷　「ＥＮＴＥＲ……これか？！」

そのままＥＮＴＥＲを押すと電子音が連続して鳴りだす。

ファイズフォン　「ＳＴＡＮＤＩＮＧ　ＢＹ」

そのまま携帯を持つ手を天に上げる、ちなみに夷はただ兄の真似をしてるだけだが、その姿は当時巧が変身する姿によく似ていた。

オルフェノク　「ははは、人間に変身できるわけないだろうが！」

巧　「（あ、忘れてた）」

久々に変身するので巧は変身するための条件をきれいさっぱり忘れていた。

夷　「行くぜ……変身！」

ファイズフォン　「ＣＯＮＰＬＥＴＥ」

そのままベルトに装着された携帯が電子音をならし、赤い線が夷の体に沿って浮き出る。

まるで骨組みでも作っているかのように夷の体を照らす。

オルフェノク　「な、なんだと？！」

巧　「夷？！」

一瞬光が辺りを照らし出すとそこには黒と銀のボディ、黄色い目、体中に赤いラインが走る戦士・・・ファイズに変わっていた。

夷　「兄さんが言ってた……」

夷は右手を天に向けながら言葉を紡ぐ。

夷　「男だったら……友達は絶対に助けろってな！」

猫舌のクリーニング屋（後書き）

次回予告

Ｏｐｅｎ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ．　Ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　φ'ｓ！！

夷　「これがファイズ？！」

圧倒的な力

ファイズフォン　「ＥＸＣＣＤ　ＣＨＡＲＧＥ」

決まるか？　クリムゾンスマッシュ！

？　「ふ、俺を誰だと思ってる？　天の道を行き総てを司る者だぞ？」

現れるブラコン＆シスコン兄貴

？　「キシュアァアアアアアアアアア」

そして現れた人類の敵……ワーム

？　「ふ、ワームなら殲滅する！　変身！」

ゼクター　「ＨＥＮＳＨＩＮ」

変身するもう一つの仮面ライダー、そのとき夷は？

夷　「力があるなら、それを使うさ。　俺は……もう天にぃの足手まといじゃない！」

ファイズフォン　「ＣＯＮＰＬＥＴＥ」

赤き閃光と太陽の神、二つの仮面ライダーが今、現れる。

555（ファイズ）（前書き）

今回は戦闘パート。

ファイズのあの技が繰り出されます。　あ、あと天の道の人が出ます

555（ファイズ）

夷　「……来いよ」

夷はファイティングポーズをとりながら、右手で相手を挑発する。オルフェノクは一瞬おびえるが、何か思い出したように笑い出す。

オルフェノク　「ははははは、いくらファイズになったとしても、少年だろうがなめるなぁあああああああ！」

そういって突っ込んでくるオルフェノクだったが、相手が悪かった。突っ込んでくるオルフェノクは愚直なほどまっすぐだった、容易に軌道は予測できた夷は、そのスピードを利用して避けて足をかけた。

オルフェノク　「うぉおおお？！！」

夷　「アホか、天にぃだったらぼこされてんぞ？」

普段から夷は天道（兄）に修行と言う名のいじめ（夷視点、ちなみに夷の身体能力はオルフェノクレベル、つまり人外）……とある心優しい鬼の弟子入りしたこともあったが。

夷　「あんたはその力を全然使えてないよ、それだったらヒビキさんのこぶしの方が怖い」

オルフェノク　「なめ――うが！」

夷がこぶしを突出し、オルフェノクの顎にパンチを繰り出す。　オルフェノクは顎に当たっただけでふらつく。

どうやら体の構造は人間と変わらないらしい。

夷　「しかし、体軽すぎる」

夷の纏っているファイズは、まぁ種類的にはパワードスーツによく似ている。
パンチはゆうに数トンの威力はある、全体的に身体能力は上がっている。

夷　「早く終わらせたいなぁ」

巧　「夷！」

突然巧に呼ばれた夷は首を振り向ける、するとちょうど手になにかを投げ込まれる。
どうやらトーチライトのようだった、確かにベルトや携帯と一緒にはじけ飛んでいたが？

夷　「え？　え？」

巧　「携帯についてるミッションメモリーをとれ！」

夷　「なにそれ？　どれ？」

巧　「メモリーカードみたいのがあるだろ？！　それをそれにつっこめ！」

夷は言われたようにメモリーカードをライトに差し込むと先が飛び出す。

ファイズフォン　「ＲＥＡＤＹ」

すると音声が流れる。　夷は本能的に右足にそれをつける、まるで長い間それを扱ってきたかのように……。
そして腰の携帯を開き、『ＥＮＴＥＲ』押す。

ファイズフォン　「ＥＸＣＣＤ　ＣＨＡＲＧＥ」

夷　「……行くぜ」

巧　「な、なんでだ？！」

夷は右足に力を入れるように腰を落とし、右足を前に左足を後ろに構える。
するとベルトから光がファイズの赤い線にそって右足のライト……
ファイズポインターにエネルギーがチャージされる。

オルフェノク　「く、くそぉおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

夷　「ハッ！」

気合の一言と共に右足を突進してきたオルフェノクに向ける。
すると赤い棒状の光がオルフェノクに向かって伸び、円錐型になりその体を固定する。

オルフェノク　「う、ううげう、バカな俺がこんなガキに」

夷　「てぃやぁあああああああああああああああああああ！！」

夷が叫びながら赤い円錐に右足を突出しながらジャンプする、する

と夷の体がいったん消え、円錐が激しく回転する。　ファイズの必殺技、クリムゾンスマッシュ、６０％のエネルギーを使う大技。

そして夷の体が現れた瞬間、オルフェノクの体にφの文字が浮き出るとオルフェノクの体に青い炎が出てきた、そしてオルフェノクが灰になった。

＝＝＝＝十分後

夷　「いったいあれは？」

夷は手にはあのファイズのベルト、その他もろもろが入ったアタッシュケースを持ち、さらに洗濯物も持っていた。

実はあの後、巧に『三日後に来い、来たら全部話す』と言われたのだ、それにファイズになるための変身ツールをもらった。　巧は『……俺にはもう使えないし、使えるお前が持っておいた方がいいだろ？』といわれてもらったのだった。

夷　「オルフェノクか、ちくしょう途中から頭が痛い」

実は戦っているとき、夷は最初は意識があったのだがクリムゾンスマッシュを放った前後の記憶が曖昧なのだ、つうか覚えていない、なぜ自分がやり方を知っていたのか、すら。

夷　「さぁ、早くか――」

？　「来い、カブトゼクタぁあああああああああああ！」

夷が帰ろうとした瞬間、誰かが叫んだ。　あまりにでかい声だったので夷はその声の方向に歩いていく。

二度ある音は三度あるとはこのことだ。

夷　「ちっ、誰だコラァアアアアアアアアアアアアアア！」

叫びながら現場に行くとベルトをつけた青年と黒いアーマーをつけた数人の大人がいた、それと見知った顔も……

夷　「って、神崎？！」

愛衣　「え、夷君？！」

？　「君危ないから逃げなさい！」

ベルトをつけた青年が警告する。

夷はあたりを見回すと、そこには緑色の化け物が居た。

夷　「おいおい、今日は化け物のバーゲンセールか？」

愛衣　「逃げて！　殺されちゃうよぉ！」

一歩も動けない夷に愛衣は再度、警告する。

しかし夷は動かない。

夷　「またかぁ、俺はヒーローじゃない――」

そのとき、空から何かが飛んでくる。
羽音がする、昆虫のようだったが、夷は否定する。　外見はカブトムシだが金属でできていた。

？　「来い、カブトゼクタぁあああああああああ！」

青年が再度叫ぶとカブトムシが青年の手……をすり抜けた。

全員　「「「はぁあああああ？！！」」」

するとゼクターが誰かの手に収まる。
全員の注目が集まるとその人物がしゃべりだす。

？　「ふ、俺を誰だと思ってる？　天の道を行き総てを司る者だぞ？」

夷　「おいおい、なんでここにいる兄さん？」

愛衣　「え？　義兄さん？」

夷　「ちわうわい！　つーかなんでいるんだよ！　天にぃ」

天道　「ふ、言っただろ？　まあいい、ワーム貴様らを殲滅する！」

天道が勢いよく右手のゼクターを持ち上げながら左手で上着を脱ぐと、腰には唖然としている青年と同じベルトが巻かれていた。

夷　「おいおいまさか？！」

天道　「変身」

ゼクター　「ＨＥＮＳＨＩＮ」

ゼクターからの電子音が鳴り、天道の体に装甲が纏わりついていく。
唖然としながら全員が見ていると、そこにいたのは、仮面ライダーカブトマスクドフォームだった。

愛衣　「なんで加賀美さんじゃなくて、天道さんが？！」

加賀美　「ウソだろ、おい！」

夷　「兄さん？」

すると天道がおもむろに右手を天に向けて言葉を紡ぐ。

天道　「おばあちゃんが言ってた、俺は天の道を行き総べてを司る男、天道総司とな」

高らかと宣言する。
一方、夷もせっせとケースからベルトを出す。

愛衣　「それは？！　ベルト？！」

まるで悲鳴な様な声だが夷の耳には入っていなかった。

夷　「くそ、なんでだよ」

ファイズフォン　「５，５，５」

ファイズフォンのコードを入力する。
そして電子音がなっている携帯をベルトに差し込む。

夷　「変身！」

ファイズフォン　「ＣＯＮＰＬＥＴＥ」

すると夷の体が光、次の瞬間には仮面ライダー５５５が立っていた。
またも驚く一同。

夷　「力があるなら、それを使うさ。　俺は……もう天にぃの足手まといじゃない！」

天道　「夷……行くぞ！」

夷　「おう！」

今ここに後に伝説とされるまでに至る、太陽と月の神のコンビが誕生した瞬間だった。

５５５（ファイズ）（後書き）

次回予告

天の道を行き、総てを司る！

天道　「ワームごときが俺を倒せるとも？」

圧倒的な兄の力

夷　「くそ！　なんだ？！　いきなり速くなった？！」

発揮されるワームの能力

加賀美　「クロックアップできないのか？！」

愛衣　「夷君！」

絶体絶命の夷

天道　「俺の弟に手を出すなぁあああああああ！」

ゼクター　「ＣＬＯＣＫ　ＵＰ」

ワーム　「ウギャァアアアアアアア？！！」

切れる天道。

ゼクター　「ＯＮＥ，ＴＷＯ，ＴＨＲＥＥ」

天道　「ライダー……キック」

出るかライダーキック。

夷　「……アクセル」

ファイズフォン　「ＣＯＮＰＬＥＴＥ」

加速する赤き閃光

夷　「付き合ってやるよ、十秒間だけだけどな！」

太陽の神、加速する白銀（前書き）

今回は戦闘ぱーとしかありません。
……ちゃんと原作キャラがかけているか心配です。
批評、感想はバッチこい！
今回から次回のタイトルを言いますのでよろしくお願いします。

太陽の神、加速する白銀

天道　「……いろいろ言いたいことがあるが」

夷　「今は戦えだろ？」

二人はうなづきながら緑色の生物に向かっていく。
カブトと555はまるで歴戦の戦友のように息がぴったりな攻撃をワームに仕掛けていく。

夷　「天にぃ、帰ったら樹花と一緒に問い詰めるからな？」

天道　「その前にお前のそれはなんだ？」

戦いの途中だが余裕の二人に唖然としてみる外野の加賀美、愛衣、そしてゼクトルーパー達。
圧倒的な力がワームを蹂躙し、倒していく。　もはやワームは十数体居たがもう数体しか残っていなかった。

ワーム　「ウゴオオオ？！」

ワーム2　「ウガォオオ！」

ワーム3　「ウガカアアアアア！」

突然ワームが三体同時に叫ぶ、するとなにかしたいのか体を動かして何かをしようとしている。
次の瞬間、ワームが脱皮した。

加賀美　「脱皮か、まずいぞ！」

夷　「……マジで虫だなぁ、おい」

天道　「……」

すると天道が右手でゼクターの角の部分、ホーンに触れ少しだけ右に倒す。
そうするとカブトの装甲が腕から順に浮き上がる、まるで脱皮するかのように。　頭の装甲まで浮き上がると天道が叫ぶ。

天道　「キャストオフ」

ゼクター　「ＣＡＳＴ　ＯＦＦ」

天道が右にゼクターを倒すと同時に装甲がはじけ飛ぶ。
そして下に隠れていたさっきよりも軽量そうな装甲を纏った天道が現れる。

ゼクター　「ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ」

仮面ライダーカブトライダーフォーム、超高速戦闘型のカブトのもう一つの姿。

天道　「気を付けろ夷、あいつらをなめるなよ？」

夷　「……重装甲かと思ったら今度はカブトムシかよ、ここは昆虫博物館か？」

夷がため息をつくとワームが消えた。

まるで映画のコマを切り抜いたように消えたのだ、驚く夷だったがその瞬間背中を殴られる。

夷　「がぁ？！　ぐぉおおおおお！！」

そのまま数十発もの蹴りやパンチをくらい地面に転がる夷。
ベルトには当たらなかったようだが数十発ものパンチと蹴りはきつかったようだ、倒れたまま動けないようで苦しく息を吐いていた。
そしてワームが天道と夷を取り囲むように現れる。

夷　「ハァハァ、ぐっ！」

天道　「……クロックアップ！」

天道がベルトの右側のボタンを押しながら叫ぶ。

ゼクター　「ＣＬＯＣＫ　ＵＰ」

その瞬間、天道の体消え、ワームが吹き飛ぶほとんど同時にだ。
なすすべもなく蹴りを入れられるワームの一体が耐え切れなかったようでその体を爆砕し消滅した。

＝＝＝＝クロックアップ中の戦闘

天道　「クロックアップ！」

その瞬間、ライダーフォームの最大のシステム『クロックアップ』が発動した。
最大発動時間は一分だが……一分は長すぎた、そもそもクロックアップはワームがしてくる一種の超スピードである。
クロックアップを発動中は時間が止まっているように見えてしまう、雨も電車も人さえもだ。実際は止まっていないのだが、スピードが速すぎてそう見えてしまうのだ。

天道　「俺の弟に手を出すなぁあああああああああ！」

普段の天道なら絶対に言わないがクロックアップ中なので誰にも聞かれない様で叫んだというわけだ。
さすがブラコン、蹴りだけで成虫ワームを倒した。

天道　「行くぞ」

天道はゼクターの側面のフルスロットルを順番に押していく。

ゼクター　「ＯＷＮ，ＴＷＯ，ＴＨＲＥＥ」

ゼクターの電子音が鳴り、天道は左手でゼクターの本体をつかみ、右手でセクターホーンを左に倒す。
そして一気にそのままゼクターホーンを右に倒す、するとゼクターから出た電流、タキオン粒子がカブトの頭のカブトホーンに集まる。

ゼクター　「ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ」

天道　「ライダー……キック」

ゼクターからの電子音と共に天道もつぶやく、電流を纏った右足を振り上げ、回し蹴りを一体のワームにぶつける。すると回し蹴りをくらったワームの体に一瞬電流がはしる、そして……

ゼクター　「ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ」

ゼクターの電子音が鳴り響いた瞬間、ワームが爆散した。

＝＝＝その頃ＺＥＣＴの人たちは

加賀美　「なんで、なんでカブトになれるんだ、あいつが？」

愛衣　「夷君がマスクドライダーなんて」

ちなみにマスクドライダーは仮面ライダーのことだ。

加賀美はなぜ自分が選ばれなかったのかということを自問自答していて、愛衣はなぜ一般人の夷が変身したのかわからず混乱していた。

もう一人、その場で唖然となっていた人がいた、田所修一と呼ばれる男が居た。

田所　「（あれはファイズ？！　初期のライダーがなぜ……あれの所有者はもう変身できないはずだが？！）」

最初のライダーと言われる理由は追々説明するが、これだけは言っておこう。
ファイズは元々はＺＥＣＴが作り、それをオルフェノクが改造しただけと。

加賀美　「けどあの少年はいったい？　ゼクターも使わずに変身するなんて」

愛衣　「両希　夷」

加賀美　「知ってるのか？！」

愛衣　「は、はい同じ学校なので」

田所　「……彼の身元をあらいだせ」

愛衣　「は、はい？」

田所　「彼の身元をあらいだせ！」

愛衣　「は、いいいいいい！」

走っていく愛衣を見つめる田所、加賀美は怪訝そうに田所を見つめる。
しかし田所はファイズを見つめる。

加賀美　「田所さん、なぜ彼を調べるんですか？」

田所　「あれが初期のマスクドライダーだからだ」

加賀美　「はぁ？！」

＝＝＝＝＝一方ファイズは

夷　「い、いてえなぁ」

全身の痛みに耐えていた夷だったが突然ワームの三体のうち二体が爆散したのを見る。
夷は寝転がりながら自分の腕についている時計を見る。

夷　「ずっと気になってたんだよな、これはなんだよ？」

ワーム　「ギャァアアアアアアア！」

ワームが立ち消え、またもやクロックアップに入る。
夷は寝転がりながら携帯のミッションメモリーを抜き取り、ファイズポインターにつける。

ファイズフォン　「ＲＥＡＤＹ」

次に夷は腕の時計を見る、そこには白いミッションメモリーが収まっていた。
間髪入れずにそのメモリーをファイズフォンに差し込む。

ファイズフォン　「ＣＯＮＰＬＥＴＥ」

するとファイズの胸の装甲が開き、肩につく。そのままファイズの胸に心臓のような球体が現れ、ファイズの装甲が黒く変色する、そしてファイズの目が紅くなる。全体のフォルムは黒だが赤い線だったところが白くなっている。

ファイズの超高速戦闘フォーム、アクセルフォーム。

夷　「アクセル……やれるか」

加賀美　「なんだ？　色が変わった？！」

夷は腕の時計、ファイズアクセルに手を伸ばすと右手でボタンを押すと電子音が鳴りだし、時計に数字が現れ、何かをカウントする。

ファイズアクセル　「ＳＴＡＲＴ　ＵＰ」

ファイズはファイティングポーズをとると足を踏み出し、とんでもないスピードで動き出す。

＝＝＝＝＝クロックアップ中のワームは

ワーム　「ギュアァアアアアア」

ワームはファイズではなくカブトを狙っていた、クロックオーバーしたカブトは油断してるはず……そう思っていたはずだった。

ワーム　「ギャァアア？！」

突然背中に衝撃を受け、声を出すワーム。目を衝撃の方に向けるとそこには白銀の閃光が立っていた
そしてそのままワームに突っ込み蹴りやパンチを繰り出す。
圧倒的な暴力にワームはなすすべがなく殴られ、けられていく。

夷　「付き合ってやるよ、十秒間だけだけどな！」

ワームは希望を持てた、十秒耐えれば奴を切り裂けると……しかしそれはあっけもなく壊れた。
突然ファイズの姿が見えなくなったのだ、それはクロックアップが終了したと分かった瞬間、全身に打撃を受ける。

ファイズアクセル　「３」

夷が一度止まり、ワームに後姿をみせながら手首をスナップさせる。
そして携帯を開きＥＮＴＥＲを押す。

ファイズフォン　「ＥＸＣＣＤ　ＣＨＡＲＧＥ」

白い線をなぞって赤い光が右足のファイズポインターに集まる。
そして夷は飛び上がり空中に円錐が現れる。

ファイズアクセル　「２」

しかしそれだけでは終わらなかった複数の円錐が空中に現れワームを囲むように現れる。
絶望がワームを襲う、そして聞こえるはずない声がワームに聞こえた。

夷　「連続クリムゾンスマッシュ、いやアクセルクリムゾンスマッシュか、……一秒だけだが走馬灯しろ」

死刑宣告のような言葉の次の瞬間、無数のクリムゾンスマッシュ（これからは長いんでＣＳと表記します）がワームの体を蹂躙し夷が現れる。
そして天道のように右手を天に向けて伸ばす。

夷　「俺は……天の道に行けないが、閃光としてそれを導く男、両希　夷だ」

ファイズアクセル　「１，ＴＩＭＥ　ＯＵＴ」

そしてワームの体にφの文字が浮き出てた瞬間、体が砂となり消えた。

夷　「……」

愛衣　「……すごい」

加賀美　「クロックアップか？　にしては速度が少し遅い気が」

ファイズフォン　「ＲＥＦＯＲＭＡＴＩＯＮ」

ファイズフォンが再び電子音が鳴るとファイズが変色し元の赤のフ

ァイズに戻る。
そして夷は腰のファイズフォンを取り出し、変身解除コードを入力する。
するとファイズが一瞬光、夷に戻る。

天道　「……夷」

夷　「さぁきっちり話してもらおうか、あんたのそのベルトもその姿も！」

しかしそれはかなわなかった、突然黒いアーマーを着た者たちが夷と天道を包囲する。
左手の銃を構えながらだ、夷は変身しようかと思ったが……やめた。

田所　「さぁ、一緒に来てもらおうか……カブト、そしてファイズ」

太陽の神、加速する白銀（後書き）

次回予告

Ｏｐｅｎ ｙｏｕｒ ｅｙｅｓ． Ｆｏｒ ｔｈｅ ｎｅｘｔ φ

ｓ！！

夷　「作者、次は俺たちの紹介だって？」

明かされる夷のステータス

愛衣　「……私もですか？！」

スリーサイズもね

夷　「こいつ変態だ」

変態はステータス！

天道　「俺も忘れるな」

巧　「俺もだ」

なぜか原作キャラまで？

夷　「えーと今回から次回の題名を言います」

それではどーぞ！

夷　「明かされるキャラ設定、ちょっとのおまけ」

次回も

夷　「見なきゃＣＳだぜ？」

明かされるキャラ設定、ちょっとのおまけ（前書き）

ネタバレ有りなので見たくない人は戻ってください。

後書きにおまけが

明かされるキャラ設定、ちょっとのおまけ

両希（りょうき）　夷（えびす）

年齢１５歳　１６歳

好きなもの　肉、兄、妹、姉、仲間、読書、訓練、師匠たち

嫌いなもの　人を馬鹿にする人、野菜、兄との特訓、姉のＯＨＡＮＡＳＨＩ、おやっさんをバカにすること

１５歳のデータ

過去の記憶を一切覚えておらず、七年前のあの隕石事故の時に天道家に保護される（そのとき天道と会うが最初は嫌っていた）。最初は感情すらなかったが妹の樹花が山で遊んだいたときに行方不明となるが夷は二日間探し回り見つけ出した。もちろん天道とそのとき和解し兄弟として認め合った。そのあとは天道がブラコン化した、どうしてこうなった？　そのあとは天道と共に修業し、勉強、料理共に最高レベルである。学校では静かに暮らしているがファンクラブまである模様、一度天道が授業参観ではっちゃけてしまいツッコミんでしまったこともありました。

一度だけとある通りすがりの仮面ライダーに巻き込まれ、ヒビキの世界に飛ばされてしまい、そこで三人目の弟子となる（仮面ライダーなどの記憶は失っている）

ちなみに夷が覚えていないが七年前のあのとき、夷がベルトを持っていたが、天道が回収し厳重に保管している。

ひよりとは外で絵を描いているときに出会い、バイト先で偶然出会った、そのときにひよりねえと言ってひよりを姉と慕った（そのときまんざらでもなかったようで）

５５５組とは二年前に出会ったが巧だけは作品が始まった三か月前に出会った。
Ｗ組も2年前におやっさんの弟子になりたくて、わざわざ風都まで追いかけた（おやっさんは最初は渋ったが最終的に折れた。夷は学校を休んだ）風都タワーの事件でおやっさんからスカルメモリとロストドライバーを受け取ったがまだ自分には早いということで翔太郎に預けるが一年後に風都タワー占拠事件時におやっさんの霊と会い「お前がスカルを受け継げ」と言われ、スカルと帽子を完全に受け継ぎＮＥＶＥＲのメンバーと戦う。
そのときメモリブレイクしていなかったＥｔｅｒｎｉｔｙメモリを大道　克己から受け継いだ。
なぜメモリと適合できるのかフィリップの地球の本棚すらわからなかった。
ちなみに風都では鳴海　荘吉の後継者として認識されているがハーフボイルドとは言われていない。
愛読書は「記憶は戻る５０の方法」

１６歳のデータ
一年前と比べ物にならないほど成長した。現在ではＺＥＣＴのシャドウの隊長をしていたがＺＥＣＴが解散したことによって鳴海探偵事務所の出張探偵として風都以外の依頼をこなしている。
使用できるライダーはファイズ、オーガ、ブルーカブト、スカル、エターナル。オルフェノク用ではファイズとオーガを使い、ワームではブルーカブト、探偵の仕事ではスカル、エターナルを使う。
記憶が戻っており、一時は絶望したが通りすがりの仮面ライダーと共に一時旅をした。そのとき自分の生きる道を見つけた。愛衣とはいい仲だそうだ。
一応、カブトではハイパーにもなれる。

神崎（かんざき）　愛衣（あい）
１５歳

好きなもの　野菜、家族、読書、音楽鑑賞、夷

嫌いなもの　肉、ワーム、天道、樹花、幽霊

スリーサイズ　Ｂ（ここから先は爆散した後がありみえない、彼女の名誉のためまあ平均よりも大きいがそんな大きくないと言っておこう）

データ
学校ではアイドル的な存在だが心の中は黒い復讐心でいっぱいであった。ＺＥＣＴではライダーの適正がありただいま開発中である。
七年前にワームに両親を殺され、加賀美　陸に保護され、養子にとなる。
夷に惚れたのは自分の心の中を見透かされ、それを矯正させられたからであり相談に乗ってくれたから。
しかしその手の知識が赤ん坊並になかった夷に玉砕（知識がなかったのは天道のせい。それを知ったから天道が苦手）玉砕した後、兄である加賀美に当たり散らしたのはしかたない。

しかし普通の１５歳であることは変わりなく、普段はなんも変わらない。

乾（いぬい）　巧（たくみ）
年齢　２０歳

仮面ライダー５５５だったが最終回でのこともあり、あと一回でもファイズに変身すると死んでしまうのでファイズを一時期、スマートブレインに預ける（そのとき改造され、出力がカイザ並にあがった）
木場に薬をうたれたがそのあと解毒剤をうたれ、普通に生きていればあと４０年も生きれるはずだそうだ。
原作よりも性格が緩和されている、クリーニング屋としての腕が上がっている。
猫舌なのは理由があるがそれは原作で見てください。

天道（てんどう）　総司（そうじ）

仮面ライダーカブト、自分が世界で１番偉いと本気で思っており、天を指し示すポーズをとる。
独力で物事を解決しようとする傾向が強いため、自分で解決できないことには脆く、また度を越した秘密主義を貫くことから誤解を招いてしまうこともある。自らを選ばれし者と信じ、戦う日が来るまで準備を続けてきたため、定職に就いていない。住んでいる家はかなりの豪邸。７年間の鍛錬を費やしたので、生身でもワームと互角に戦えるなど極めて高い戦闘能力を持つ。
妹と弟には甘く、傷つくとそうとうに焦ってしまう。作品でもクロックアップしたワームに夷がぼこぼこにされると切れてしまった。
夷とは本当の兄弟のような関係であり、信頼関係がすさまじい。

明かされるキャラ設定、ちょっとのおまけ（後書き）

これが投稿する前の話である。

夷　「おい、てめえ俺の過去明かしてんじゃねえよ！」

愛衣　「スリーサイズは明かしてませんよね！」

もちろん明かしたさ！　俺は変態紳士なのさぁあああああああ！

夷　「ブルーゼクター」

ゼクター　「ＨＥＮＳＨＩＮ」

え、な、なぜライダーフォームに？　って、チャージアップしないでぇえええええ

ゼクター　「ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ」

夷　「愛衣のスリーサイズを明かすなぁあああああああああ！」

ぎゃぁあああああああああああああ！

ここから次回予告

これで決まりだ！

夷　「俺をどうする気だ？」

包囲される夷と天道

天道　「話すことなんてないからな」

ゼクター　「ＣＬＯＣＫ　ＵＰ」

速攻で逃げる兄

？　「兄も夷さんも何してたんですか？！」

現れる妹

？　「ファイズとは、な。まだ残っていたとは」

？　「……破壊しますか？」

暗躍するＺＥＣＴ

夷　「たく、風都で懲りてなかったのか？」

ガイアメモリ　「ＳＫＵＬＬ」

もう一つの夷の力

夷　「変身」

ガイアメモリ　「ＳＫＵＬＬ」

二代目のスカル

夷　「さあ、お前の罪を……数えろ」

夷　「次回、もう一つのＳ／二代目のスカル」

もう一つのS／二代目のスカル（前書き）

……どんどん主人公がチート化しかけてるような。

そんなことは……ないはず

もう一つのS／二代目のスカル

夷　「……どうすんのこれ？」

加賀美　「悪いけど一緒に来てもらうよ……両希夷君」

囲んでくる加賀美たちを睨めつけながら悪態をつく夷、ファイズになれば突破は可能だが……正直に言うと夷の体は限界に近かった。最初の戦闘にアクセルを使った高速戦闘、いくらライダーとはいえ体の負担が限界だった、体を鍛えていなかったら倒れていただろう。そこは評価すべきだが夷は混乱していた。

夷　「（フォンライダーシステム、アクセルフォーム、クロックアップ……なんでこんな用語がスラスラと出てくるんだ？　てかこれが俺の記憶と関係しるのか？！）」

身に覚えのない記憶の隅に一つだけ身に覚えのある記憶が頭によぎった。

変わった服装にカメラをぶら下げた……夷のあこがれた人

？　「通りすがりの仮面ライダーだ！　覚えておけ！」

夷　「（通りすがりの……ああ、そうだ俺は会ってたんだ、おやっさんに会う前に）」

田所　「君たちはＺＥＣＴ本部まで同行してもらう、大丈夫だ。心配はいらない少し事情を聞くだけだ」

天道　「……お前らに言うことなど何もない、帰るぞ夷」

夷　「え?！　ちょっと待て、お――」

ゼクター　「ＣＬＯＣＫ　ＵＰ」

その瞬間、カブトと夷の姿が消えた。クロックアップによって消えたのだろうがＺＥＣＴの面々にはたまったものではない。
本来のカブトの所有者になるはずだった加賀美は唖然として身動き一つとっていないし、愛衣はアワワワと言いながら混乱してるし、田所は頭を抱えながらこれからどうするか悩んでいた。

加賀美　「いったい、あいつらは何者なんだ?」

愛衣　「兄さん、もう今日は撤収しましょう」

そういって加賀美たちは撤収していった。その場には証拠など一切残されていなかった。
そう一切だ。

――――――――一方夷たちは

夷　「――い、ってもういないし！」

どうやら天道はクロックアップでどこかに行ってしまったようで、どこにもいない。夷の足元にはファイズのアタッシュケースが転がっていた、天道が回収してくれたのだろう。
夷はため息をつきながらこれからどうするか考える。

夷　「……まずは本格的に記憶を取り戻さないとな、それとこいつも」

手に握られているベルトとアタッシュケースを交互に見る。……正直これから夷がどうなるかはわからないが

夷　「家に帰ろう」

家に向けて歩き出す夷は重大なことを思い出す。

夷　「洗濯物は？」

妹に小言を言われるだろう、夷は帰り道を歩きながらため息をつく。

？　「まったくなにしてたの？！　夷さん！」

家に帰ると同時に戸籍上は妹である、天道　樹花に小言を言われる夷。
案の定、洗濯物の件は怒られた。今は家のリビングで樹花に怒られている。
なぜ夷を、さんづけにする理由は「だって歳近いし、兄と思いたくない」だそうです。

夷　「いい加減、俺のことは、さんじゃなくて、兄さんとか呼べよ！」

樹花　「嫌です、あなたは兄と思いたくない」

夷　「それは……俺が兄としてはダメダメだということか？」

愕然とした夷は床に膝をつけ、土下座でもするかのように床に頭を擦り付ける。
一応、夷はブラコンでもあり、シスコンでもあった。

樹花　「（兄弟じゃ、結婚できないしね）」

……まああれだ、兄が兄なら妹も妹ということだ。
そのときリビングの窓からスタッグフォンと呼ばれるギジメモリを組み込んだガジェットが飛び込んでくる。
夷はそれを見ると自室に駆け上がる。ちなみに夷の部屋は二階にある。
そして勢いよく自分の部屋のドアをぶち破り、机の上に置いてあるロストドライバーと二つのメモリ、そして形見の帽子をとる、ちなみにファイズのアタッシュケースはリビングに置きっぱなしだ。

夷　「悪い、樹花。ドーパントが出たみたいだから行くな」

そしてリビングまで行くと妹に一言言ってから家を出ようとする、が樹花に呼び止められる。

樹花　「待ってよ、なんで夷さんが行かなきゃなんないの？！」

夷　「樹花？」

樹花　「それにドーパントは風都の人たちがいるでしょ？！」

夷　「俺は行かなきゃ、それがおやっさんとの約束だからな」

今の夷の恰好は翔太郎の服を白くしたような服を着ている。
夷は帽子を深くかぶる。

夷　「それが仮面ライダーだからだ」

樹花　「……わかんないよ」

それ以降、樹花はうつむく。夷はその頭を一回だけ撫でてから家をでた。
そして庭に出てから声を上げる。

夷　「スカルボイルダー！！」

するとどこからともなく、白色のバイクが夷にめがけて走ってくる。
一向にスピードを落とさないバイクは夷の前まで来ると突然止まる。
とある探偵の助手に改造されたスカルボイルダーは音声入力で自動運転して夷の元まで来るようになり、カラーリングも黒から白に変更した。

夷　「さぁ、行くか！」

スタッグフォンからの情報をもとにドーパントの元に急ぐ夷。
その背をじっと見つめる天道もいたが視界から消えた後、家の中に入っていた。

＝＝＝＝＝ＺＥＣＴ本部

田所　『……これが今回の報告です』

？　「そうかもういいぞ」

液晶画面に映った田所が消えた瞬間、深く腰を椅子に腰かける男二人。

？　「……まさか、ファイズが残っていたとは」

？　「どうしますか？　破壊しますか？　それとも捕獲？」

一人の男の名は加賀美　陸、ＺＥＣＴの実力者でもあり、現在の警察の警視総監でもある。

もう一人は三島正人、陸の右腕的存在である。

陸　「まだいいだろう、当分は見送りだ」

三島　「いいのですか？」

陸　「いいだろう、いくら旧世代のライダーとはいえ、あれはマスクドライダーシステムとは別物だ」

三島　「しかし、あれは……ファイズはクロックアップを搭載しています」

陸　「……あれは不完全なシステムだ、クロックアップが完全にできるわけじゃない」

三島　「あなたがそういうなら……」

そういいながら退出する三島、残った陸はため息をつきながらとある資料を見る。

そこには小さな子供の顔写真が……

陸　「タイプゼロの生き残りか？　それとも……」

その資料には『人口ライダー量産計画』と書かれていた。

一枚の資料にはもっとも能力が高かった少年のデータが書かれていた。名前は適合者ーEと書かれていた。

＝＝＝＝＝＝一方の夷は

夷　「ここか……」

そこには破壊された車がたくさんあり、道路がひどく壊されていた。
そこにぽつんと男が座っていた。

男　「たりない、こんな破壊じゃ足りないぃぃいいいいいいいいいいいいい！！」

叫びだす男は地団駄を踏む。まるで子供だった。
子供ならまだましだ、しかし外見５０歳のオヤジがそんなことをしてるのは少しひいてしまう。
しかし、夷は適当なところにスカルボイルダーを停車させると帽子をかぶり、男に近づく。

男　「そうだ、この辺一帯を破壊しつくしてやろう！　あはははははぁああああああああ！！」

夷　「笑っているところ悪いが邪魔させてもらうぜ？」

夷が声をかけると不機嫌そうに振り返る男。

男　「なんだ？　俺が誰か知ってるのかよ？！」

夷　「知らんし、興味はないぃ」

男　「けっ、かわいげのないガキだ。言ってやろうか、俺は選ばれた人間だよ」

夷　「はぁ、これだからガイアメモリを過信する奴は」

やれやれといった首を振りながら腰に赤い物体を巻きつける。
それはロストドライバーと呼ばれた、仮面ライダーになるための装備。

男　「くそがどいつもこいつもバカにしやがって、こいつを見て驚きやがれ！」

ガイアメモリ（これからはＧＭと訳します）　「ＭＡＸＩＭＵＭ」

すると男がＧＭを自分の体に差し込むとＧＭが男の体内に入り込む。
そして男の体に変化が現れる。
体の色が肌色一色になると体の大きさが二倍以上に膨れ上がる。

マキシマムドーパント　「さぁ、お前も恐怖しろよ！　怖がれよ！」

夷　「たく……風都で懲りてなかったのか？」

すると夷が上着の内ポケットに手に伸ばす。
そしてつかんだのＳと書かれたＵＳＢメモリ……ＧＭを取り出し、
ボタンを押す。

ＧＭ　「ＳＫＵＬＬ」

マキシマムドーパント　「お前、それガイアメモリか？　まさか……」

夷　「……変身」

ＧＭ　「ＳＫＵＬＬ」

ベルトにＧＭを挿入して横に倒すと再び音声が流れる。
そして風が夷から吹き出し、止まった瞬間夷の体が変化していた。

白い体、そして頭が骸骨のような顔になっていて頭にＳの文字のような傷が出る。それを隠すように帽子をかぶった夷は右手をドーパントに向けてあのセリフを言う。

夷　「さあ、お前の罪を……数えろ」

もう一つのS／二代目のスカル（後書き）

次回予告

夷　「さあ、撃ち抜くぜ！」

スカルマグナムが火をふく

夷　「俺は……スカルだ！」

ＧＭ　「ＳＫＵＬＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ」

繰り出すマキシマムドライブ

？　「Ａ小隊は右へ、そこに撃ちまくれ！」

現れるライダー

？　「変身」

ゼクター　「ＨＥＮＳＨＩＮ」

ザビーと呼ばれるライダー

？　「ライダースティング！」

ゼクター　「ＲＩＤＥＲ　ＳＴＩＮＧ」

天道　「次回、スカルの決意、現れるライダー」

天道　「天の道が見たければ……次回も見るんだな」

スカルの決意、現れるライダー（前書き）

か、感想を……感想をください。

こんな駄文ですが感想もらえるのはうれしいので……お願いします！

スカルの決意、現れるライダー

夷　「さあ、行くぞ！」

マキシマムドーパント（これからＭＤと訳します）　「くそ！　なんでてめえが……仮面ライダーがいやがる！」

夷　「……はぁ！」

夷はＭＤに向かってパンチをするが予想外に硬く、パンチの衝撃が通っていない。夷は蹴りも放つがこれも同じ結果だった。
ＭＤは聞かないことがわかるとさっきまでの怯えから一転、得意そうに笑いだす。

ＭＤ　「ははは、大したことなねえなぁ！　どうしたもっと打ち込んで来いよ」

夷　「……ああ、撃ち込んでやるよ！」

夷が右腕を前に突き出すとスカルマグナムと呼ばれる銃が夷の腕に現れる。
そのまま零距離でＭＤに撃ちだす。

ＭＤ　「がぁあああああああ？！！」

さすがに零距離からの銃は効いたようでそのまま吹き飛ぶＭＤ、夷は手首をスナップしてから帽子の位置を直す。一方ドーパントはかなり効いたのか、なかなか起き上がらない。

ＭＤ　「てめえ、くそが！　俺は無敵の力を手に入れたはずだ！」

夷　「ＧＭは使用者の身体能力を強化しているにすぎない。……つまりあんたが弱いってことだ」

ここで説明しておくが、所詮ＧＭも道具ということだ。使う人によれば強くもなるし弱くもなる。

夷のように体を鍛えているか、元々の能力が高ければＧＭはその力を十分に発揮できるが……五十代の普通の一般人が突然ＧＭを扱えと言われても土台無理な話である。

慣れや感覚の問題、それにＧＭの力に振り回されないのが一番の問題だ。

……つまりこう考えればいい、刃物を持っているのが普通の幼稚園生ならどうだ？　別に怖くないし、宝の持ち腐れである。つまり目の前の男はＧＭを十全に扱えていないのだ。

夷　「ＧＭは持ち主の精神状態に一番影響される。土台あんたのように半端な復讐心を持った奴じゃ無理だ」

ＭＤ　「なめるなぁあああああああああああ！」

ドーパントは夷に向かって突進する、そのスピードはすさまじく間違いなくくらったらただでは済まないだろう。しかしこれを夷は避け、膝をＭＤの腹の位置に持っていく。直後、すさまじい力が夷の足にかかるが……ドーパントにはそれ以上である。

ドーパントは自分のスピードで自身を攻撃してしまったのである、なぜなら自分から膝に当たりに行ったのである。かかる衝撃は大きかった。

ＭＤ　「ぐぉおおおおお」

それに対してこのドーパントは痛みに弱かった。マキシマム、意味は最大限、つまり身体能力が最大限まで発揮できるＧＭである、ちなみに言うがスカルとマキシマム、身体能力が高いのはマキシマムである。
しかし夷はドーパントに反応できた、なぜ？　動きが素直すぎるからだ、夷はこれでも数々のドーパントとの戦い、兄との修業、鬼の特訓、おやっさんのしごきなど上げたらきりがないほどの実戦経験と訓練をしてきた。対するは実戦経験なし、比べるのは酷だ。

ＭＤ　「畜生なめやがって！　俺は選ばれし者だ！　てめえとはちがう！」

一方夷は右手を天に向けてドーパントに向けて言葉を言う。

夷　「おばあちゃんが言ってたよ。自分自身を信じるのはいいが、驕ってはいけない、と。つまりお前は自分自身を驕っているんだよ……選ばれし者なんていない、みんな同じなんだよ」

ＭＤ　「それはお前の傲慢だろうが！　ガキはいいよな！　夢が見れて！！　俺はもう五十だ！　光なんて見えない！」

それは本心なんだろう、と夷は思ったが口には出さない。
ただ立つだけであった。男はさらにヒートアップする。

ＭＤ　「俺にだって夢はあるさ！　だがなぁ、そんなもんちっぽけなもんよ！　お前にわかるか？！　絶望も知らないくせに！」

夷　「だからって、この街を壊していいなんて言う理由にはなんねえよ！」

ＭＤ　「うるさい、うるさい、死ね死ね死ねぇぇえええええええええええええええええええええええ！！」

勢いよく突っ込むドーパントを夷は……真正面で受け止める。鈍い音が夷から発生する、ぐらっと夷の足が崩れそうになる、そこに力を込めるドーパント。

夷は正直負けかけていた、しかしある言葉が頭をよぎる。

？　『例え……ボロボロになっ、ても罪を数え続けろ、それができればお前は……』

夷　「おお……おぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

叫び声をあげ、スカルの力を最大限まで発揮する夷。ドーパントはよろける、そこにすかさずパンチを繰り出す夷、吹き飛ばされるドーパント。

ＭＤ　「お前はいったいなんだよ！」

夷　「俺は……通りすがりでも、二人で一人でもない仮面ライダー……」

夷はロストドライバーからスカルのＧＭを抜き、腰の右側、マキシマムスロットに挿入しボタンを叩く。するとＧＭから音声が流れる。

ＧＭ　「ＳＫＵＬＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ」

夷　「仮面ライダースカルだ！　行くぜ、ライダーキック！」

その言葉と同時に右足に紫色のエネルギーが集中する、手首を一度スナップさせた夷は腰を落とし、ジャンプしドーパントめがけて跳び蹴りを放つ。

夷　「せいやぁああああああああああああああああああああ！！」

ＭＤ　「ぎゃぁあああああああああああああああああああああ！」

跳び蹴りを放たれ、ドーパントに当たると一度紫の電流がドーパントの体に流れ、次の瞬間ドーパントが爆発しＧＭが排出される。

それと同時にＧＭが砕け散る、メモリブレイクと呼ばれるメモリ破壊時の名称であり、こうなったメモリは修復は不可能である。

夷　「さぁ、お前は……」

夷は着地し、帽子を押さえながらドーパントだった男の方を向く。

男は気絶していたが構わず夷は言葉を続ける。

夷　「罪を数え終えたか？」

言い終えるとロストドライバーを立てて、変身を解除する。

風が起こり、ふわりと帽子が一瞬だけ空中に飛び、夷の頭にかぶり直される。

夷は腰のロストドライバーを外そうとするが……次の瞬間、ワームが夷の目の前に飛んでくる。

夷　「……なに？　今日は厄日か？！！」

？　「一般人か？！　どいていろ！」

声がした方向を夷が向くと、蟻を彷彿させる格好をしたゼクトルーパーが何人か走ってくる。
しかし夷が見たゼクトールパー　とは少し違う点がある、スーツに金色のラインが入っている。
右手の銃のようなものでワームを撃っていくゼクトールパー。あまりの連射のせいでワームは動けず、爆散する。

夷　「圧倒的だな、おい」

帽子をかぶりながらつぶやく夷は素早く、気絶してる男をスカルボイルダーに乗せながら自動操縦のボタンを押し、安全なところまで退避させる。
するとゼクトルーパー達が徐々に集まっていく。ワームも集まるが圧倒的な連射力と連携の前にまた一体、一体と爆散していく。
夷は適当な建物の壁に隠れながらその様子を隠れ見る。するとスーツ姿のこの場にふさわしくないほど清潔な男が歩いてくる。

？　「A小隊はそのまま撃ち続けろ、B小隊は付近に注意しながら退路を断て！」

指示も的確で夷もうなされるほどのカリスマがその男にあったが、なぜか夷の頭に頼りないが妙にカリスマがあった王の資格を持つ青年とその小さな従者を思い出した。

夷　「（あれ？　誰だ？　知っているような、知らないような？）」

ゼクトルーパー　「隊長！　ワームが脱皮します！」

すると一体のワームが脱皮し、生体となってしまった。そのままクロックアップに移行したのか、撃っているトルーパー達が吹き飛ぶ。

ゼクトルーパー達　「「「うあ、あうぁあああああああああああああああ！」」」

一転して押されていくトルーパー達、そこでスーツの男が撤退するようにトルーパー達に促す。
ちょうどクロックアップから抜けたワームがスーツ姿の男に向かって突進しる。

？　「ふん、完全調和……それがシャドウのルールだ」

そして突然ワームが横に弾き飛ばされる、そこには黄色の蜂が……。
違う、あれは先刻、夷は似たのを見たことがあった。

夷　「（ゼクター？！）」

？　「変身」

ゼクター　「ＨＥＮＳＨＩＮ」

腕のブレスレッドのようなものにゼクターを装着させると腕から装甲が展開される。
カブトのマスクドフォームによく似ているが色が黄色い。

？　「この俺、矢車想が完全調和を実現させる」

自分のことを矢車と言った男はそのままワームに向けてパンチを放ち、軽やかにカウンターを狙いながら攻撃を当てていく。堅実の戦

い方に夷は驚嘆する。

夷　「（あいつ……なかなか、仲間のことを考えながら戦っている）」

実際、あのライダーは倒れている仲間を考慮して大ぶりな攻撃を控えている。その間にトルーパー達は体制を整えていく。

最後の一人が後退するとライダーは腕の蜂の羽を掴み、前にに倒す。すると腕の装甲が浮き上がり顔の装甲まで浮き上がったところで羽を後ろに戻すと装甲が吹き飛ぶ、さっきよりもスマートな装甲をしたライダーが現れる。

矢車　「キャストオフ！」

ゼクター　「ＣＡＳＴ　ＯＦＦ」

ゼクター　「ＣＨＡＮＧＥ　ＷＡＳＰ」

矢車　「クロックアップ」

矢車は腰のベルトのボタンをスライドさせクロックアップを発動させる。

ゼクター　「ＣＬＯＣＫ　ＵＰ」

するとワームが殴られ、蹴られの暴力の嵐にあう。

夷は目で追えなかったがその目を離さなかった。

ゼクター　「ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ」

数秒後、ゼクターの電子音と共に現れた矢車は腕のゼクターの腹の部分だろうかそこを手で押す。

矢車　「ライダースティング！」

ゼクター　「ＲＩＤＥＲ　ＳＴＩＮＧ」

ゼクターの電子音が鳴り響き、電流がライダーの体に流れ腕のゼクターに集まる。
一方ワームはジャンプし、ライダーに飛びかかろうとするがライダーは横を向きながらストレートをワームに放つ。

矢車　「うぉおおおおおおおおおおお！！」

完全にきまったストレートがワームの腹に打ち込まれ、ワームの体に電流が流れ爆散した。

矢車　「ふ、戦闘でもっとも重要なのはパーフェクトハーモニー、……つまりは完全調和だ」

ゼクトルーパー達　「「「矢車隊長！」」」

決め台詞をいった矢車の周りにゼクトルーパー達が集まる。
慕われているようでとてもいい連携だったと夷は素直に思った。

矢車　「さあ、そこの少年出てきなさい」

夷　「あれ？　ばれてた？」

夷は素直に姿を現す、ゼクトルーパーたちは意表を突かれたのか、

一瞬だけ動きを止めるが次の瞬間には銃を夷に向けて一斉に構える。
しかしそれを矢車が手で止める。

矢車　「やめろ！　……君は？」

夷　「ただの探偵見習いだよ」

嘘は言っていない、夷はまだ自分がおやっさんどころか兄弟子にすら届いていないと思っているが、実際は兄弟子も同じようなことを考えていた。
矢車は興味深そうにうなづきながら質問する。

矢車　「そのベルトは？」

夷　「あ、やっべ（取り忘れてたよ、こんちくしょう！）」

夷は自分の失態に舌打ちをする。
矢車は手を振りおろし、無情にも言い放つ。

矢車　「撃て」

夷　「くそ！」

ＧＭ　「ＥＴＥＲＮＡＬ」

夷は懐のスカルとは別のもう一つのＧＭのボタンを押し、速攻でベルトに差し込む。

ＧＭ　「Ｅｔｅｒｎａｌ」

差し込み、そのまま横に倒し、変身の掛け声もせずに変身する。
そしてゼクトルーパーの銃撃が夷を襲う瞬間、風が巻き起こり銃弾を弾く。そして足元から装甲が夷の体に取り巻き、黒いマントが全身を覆う。

矢車　「なに？！」

夷　「危なかったぜ。……いきなり撃ってくるとは油断したよ」

夷の体は一言でいえば白、そして腕とアンクレットには青い炎が描かれ、左右の目頭がつながり「∞（無限）」のようになっている。
しかしあのエターナルのように胸・右腕・左腿には合計２５のマキシマムスロットが設けられた「コンバットベルト」が装着されていない。あれは夷やＷとの戦いで破損し夷が完全に破壊した。
黒いマント「エターナルローブ」をまとい、夷は高らかに宣言する。

夷　「俺は仮面ライダー……エターナル！」

矢車　「エターナル？！　まさかあのエターナルか？！」

驚く矢車を無視して指をＺＥＣＴの面々に向けて言い放つ。
その姿はまるで悪魔と呼ばれたあの男そっくりだった。

夷　「さあ、地獄を楽し――いや俺が言うべきセリフは……」

矢車　「全小隊、撃て！」

その場にいるゼクトルーパー全員の銃口が夷に向けられ、その銃口から銃弾が放たれる。
のべ数千発、いくらエターナルでもこれを普通に受けたらとんでも

ないことになるだろうが……銃弾はすべてマントに弾かれ、ゼクトルーパー達に驚愕が走る。

全員　「「「「「なに？！！」」」」

夷　「さあ、お前らの罪を……」

夷がマントをはためかせ言い放つのはおなじみのあの言葉。
おやっさん、大道　克己から受け継ぎ、これからも夷が言っていくであろうセリフ。

夷　「数えろ！！」

夷は右手にナイフ……エターナルエッジを逆手に持ち、ゼクトルーパーに突っ込み。
近くにいたゼクトルーパーに斬りつけた。

スカルの決意、現れるライダー（後書き）

次回予告

これで決まりだ！

夷　「はぁあああああああああああ！」

矢車　「まだだぁあああああああああ！」

ぶつかり合う、二人のライダー

夷　「行くぜ！」

ＧＭ　「ＥＴＥＲＮＡＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ」

矢車　「ライダースティング！」

ゼクター　「ＲＩＤＥＲ　ＳＴＩＮＧ」

ぶつかり合う、二つの必殺技！

夷　「俺は……両希　夷だぁあああああ！」

ワーム　「グギャァアアアアアアアアア！」

？　「たくなに巻き込まれてんだよ」

ＧＭ　「ＣＹＣＩＯＮＥ」

ＧＭ　「ＪＯＫＥＲ」

現れる二人で一人の仮面ライダー

？　「変身」

ＧＭ　「ＣＹＣＩＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ」

仮面ライダーＷ

？　「さあお前の罪を数えろ！」

巧　「次回、Ｗの探偵／二人で一人のライダー」

巧　「めんどくさいが……次回も見てくれよな」

Wの探偵／二人で一人のライダー（前書き）

すいませんテスト期間中なので全然書けなかったんです。

……テストさえなければ高校も面白いのに。

Wの探偵／二人で一人のライダー

夷　「はぁあああああああ！」

夷はナイフを振るいながら、ゼクトルーパーの急所をわざと外しながら走り回る。
ゼクトルーパーは同士討ちを避けて、腕の銃の銃口……どうやら近接武器になるようで先端がブレード状の刃物だった。しかしエターナルエッジが触れた瞬間、バターのように切断される。

エッジもとある探偵の相棒に改造され、切れ味が以前のエッジよりも上がっている。
例え鋼鉄の十倍の硬度を持つ、ゼクトルーパーの装甲でも切り裂けるだろうが夷はあえてそれをしない。
まだＺＥＣＴと敵対するわけでもないし、それにできるだけ怪我はさせたくなかった。

ゼクトルーパー　「うぁ？！」

また一人、足を斬りつけられ、動けないところにエッジの奇襲によって銃を解体させられるゼクトルーパー達、夷は心の中で謝りながら斬りつける。
ゼクトルーパーも何もしないわけではないがいかせん、エターナルのマントが強力すぎた。
銃弾で撃っても、斬りつけても、傷一つつけられない。これでもこのゼクトルーパー達はエリートであるシャドウと呼ばれる部隊、プライドもあるし、実力もあると自負している。

しかし現状は一人のライダーに好き勝手されて、あまつは殺さない

ように手加減までされている。
プライドはズタズタである。

ゼクトルーパー　「くそぉおおおおおおおおお！」

矢車　「……全員下がれ！　俺がやろう」

ついに金色のライダーがゼクトルーパーの前に立ち、ゼクトルーパーたちは悔しそうにエターナルを一瞥すると後退する。

矢車　「正直、君の実力をなめきっていたよ」

夷　「名乗ったらどうだ？」

矢車　「これは失礼した、俺は矢車想、マスクドライダーザビーの資格者だ」

夷　「ザビーか……俺は両希　夷、仮面ライダーエターナルで探偵見習いだ」

二人のライダーがにらみ合いながら距離を測る。
夷はマントに手にかけ脱ごうとする。
一方矢車は左手のゼクターを右手で掴みながら、フルスロットルに手を伸ばす。

次の瞬間、夷がマントを脱ぎ棄て、矢車が一歩踏み出しゼクターのとがった部分、ゼクターニードルを突出しながらストレートを夷の顔に向けながら、マントを右手で払う。

夷はすでにエッジでニードルの軌道を変更させながら、左手でパン

チする。
しかしそれはザビーの右手に払われる。

矢車　「（なんて力だ！　当たったらひとたまりもない）」

夷　「（正確に急所めがけて突き出しやがった……早めに終わらせよう）」

夷はエッジを切り払いながら、矢車がさっきしたように頭に向けてエッジを突き出す。
しかしニードルを盾にしてそれを回避する。

息つく間もなく、夷は回し蹴りを放ち、ザビーも回し蹴りを放つ。
二人の足が当たった瞬間、空気が震えるがザビーが押し負け、体制を崩す。

夷　「うらぁあああああああ！」

矢車　「くそ！」

右ストレートが矢車の顔に当たり、吹き飛ばされる。
周りのゼクトルーパーから驚愕の声が漏れる。

ゼクトルーパー1　「そんな隊長が？！」

ゼクトルーパー2　「そんな？！」

夷　「行くぜ、行くぜぇえええええ！」

矢車　「なめるなぁ！」

どこぞの俺参上なライダーのように乱暴にエッジを振り回していく。
ザビーは腕のゼクターで受け止めながらこぶしを振るう。

夷　「（早く倒さないと……）」

矢車　「（まずい、完全調和が崩れる？！）」

夷　「今日はバイトなんでね、早めに……」

矢車　「俺も仕事がある、早めに……」

夷＆矢車　「「終わらせる！！」」

二人のこぶしが交差し、お互いの顔に当たり二人とも後ろによろける。
体制を立て直した夷はＧＭをベルトから外しエッジのマキシマムスロットに挿入する。
矢車も体制を立て直しながらゼクターのフルスロットルを叩く。
そしてゼクターとＧＭから同時に電子音がなる。

ＧＭ　「ＥＴＥＲＮＡＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ」

ゼクター　「ＲＩＤＥＲ　ＳＴＩＮＧ」

夷のエッジに緑色の粒子が集まり、巨大な刃を形成する。その刃はかつて風都タワーを切り裂いたことがある、あの刃よりも小さいが威力は申し分がない。
そして矢車のゼクターにも電流が流れ、力を込める。

両者に沈黙が流れる。
そこに耐え切れなかったのかゼクトルーパーの一人が足音を立てた、
その瞬間両者が足を踏み出した。

矢車　「ライダースティング！」

夷　「ブラッディヘルブレイド！」

両者の必殺技がぶつかり合う。緑と黄の電流と粒子が激しくぶつかり合い、対消滅していく。
両者とも一歩も譲らずに足を前に出そうと必死だった。

夷　「はぁあああああああああああああああああああああ！！」

矢車　「まだだぁあああああああああああ！」

気合の一言を言った後、両方とも吹き飛ぶ。
どうやら相打ちだったようだ。吹き飛ぶ二人だが夷はＧＭをエッジから引き抜き、腰のマキシマムスロットルに差し込む。

ＧＭ　「ＥＴＥＲＮＡＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ」

矢車　「しま――」

矢車は空中にいて身動きが取れない。例えクロックアップをしたとしても避けきれないだろう。
矢車は自分の敗北を確信した。夷はそのまま空中からキックの体制に入る。

ゼクトルーパー　「隊長！」

夷　「ライダーキック！」

夷の背中から粒子が溢れ、まるでジェット噴射のように夷はそのままキックをしようとする。

矢車　「（ここまでか？）」

夷　「せいやぁあああああああああああああああ！！」

夷はそのままキックを放った、ワームに……。
実はさっきからワームが居たのを知っていた夷はわざと矢車の隙をつくり、ワームの囮に使ったのだ。

夷　「くそ！　真剣勝負はここまでだ！　早く逃げろ」

矢車を受け止め、ゼクトルーパーに言う夷。
矢車をゼクトルーパーに放り投げながらエッジを抜きながらワームに立ち向かう。

矢車　「おい！　君は？！」

夷　「いいから行け！」

夷はワームを逃さないようにエッジを振り回す。
矢車は援護しようとしたが……自身のコンディションと部隊の損害率を考え、撤退の指示を出す。

矢車　「……すまない！」

夷　「ははは、一人は慣れてるんでな！」

矢車たちはエターナルにその場を任せ、その場から撤退する。
夷はワームを相手にしながらこれからどうするか真剣に考える。

夷　「（さすがに連戦はきつい、マントを脱いだのは失敗だったなぁ）」

実は夷はエターナルメモリをまだ完全に扱えていなかった。
あの事件の後、奇跡的にメモリブレイクされていなかったエターナルメモリだったが少々破損していて、ある人物に修理してもらい、未完全のエターナルメモリで戦っていたのだ。
出力は通常の三分の一まで下がっていた。さらにマキシマムドライブの多様で夷の体を疲弊させていた。

夷　「（……ここまでか？）」

ワーム　「ウゴァァァァァァァァァァァァァァァ！！」

数の暴力に個人の力は無力とも言うのか、夷は5体のワームの攻撃を避けきれず、蹴りやパンチを受け地面に転がる。
立ち上がろうとするがエターナルメモリが強制的に排出され、変身が解除される。

夷　「これは……マジでやばいな」

倒れながらつぶやく夷は覚悟を決め始めた。

夷　「（あーあ、おやっさん悪いそっちに行くよ）」

夷が目を閉じた瞬間、バイクの走る音が聞こえる。
まるでヒーローの登場みたいだな、と思う夷。
その通りヒーローがやってきた。
ただし、バイクを横倒しにして転がしワームに突っ込ませる。
夷　「おいおい、兄弟子、やりすぎだ」
バイクは４体のワームを巻き込み、転がっていく。
ワームは耐え切らなかったのか次々と爆散していく、しかしバイクは傷一つなかった。
？　「たくなに巻き込まれてんだよ」
黒い帽子をかぶりながら、歩いてくる青年……左　翔太郎だった。
腰には夷のベルトと似たものが巻かれていた。
そのベルトにはすでに緑色のＧＭが差し込まれていた。
翔太郎　「たく……お前は、あれか？！　フラグ体質って奴か？！」
夷　「まったく……早く変身しろよ、ハーフボイルド」
翔太郎　「ッ！　お前が言うなぁあああああああああああ！！」
ＧＭ　「ＪＯＫＥＲ」
翔太郎は懐から黒いＧＭを取り出し、電子音が鳴る。
それを翔太郎はまだ挿入されていない方に差し込む。
そして左手で右のＧＭを押し込み、右手で左のＧＭを押し込むと電

子音が鳴る。

ＧＭ　「ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ」

そして音楽と共に風が翔太郎の体から吹き荒れ、翔太郎の体が変化する。

右側は緑、左側が黒、そして紅い目。

その姿は風都ではおなじみのあの仮面ライダーだった。

仮面ライダーＷ、二人で一人のライダーの名前。

そして右の赤い目が点滅し、翔太郎とは違う青年の声が聞こえた。

？　「僕の家族を痛めつけるとは……いい度胸じゃないか」

フィリップ、翔太郎の相棒でもあり、夷のエターナルメモリを未完全だが修理した人物だ。

とある理由で記憶を失っていたがもう戻っている。

翔太郎　「てかなんだあいつは？！」

フィリップ　「興味深いね、検索をは――」

夷　「頼むから戦ってくれよ」

翔太郎　「悪い悪い、じゃあ行くかぁ！」

そのまま翔太郎は殴りかかる。

まだ成虫になっていないワームはＷに押される。

数発のパンチとキックを立て続けにくらったワームは地面に転がる。

そしてＷは黒いＧＭをベルトから抜き取り、マキシマムスロットル

に差し込む。

ＧＭ　「ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ」

翔太郎　「決めるぜ？　はっ！！」

次の瞬間Ｗの周りには緑の風が全身に渦を巻き、Ｗを上空高くまで上げ両足を前に突き出す。
そしてＷが二つに割れた。

翔太郎＆フィリップ　「「ＪＯＫＥＲ　ＸＴＲＥＡＭ」」」

まず黒のジョーカーの蹴りが決まり、その後に緑のサイクロンの蹴りが追撃を加える。
最後に半分になった体を元に戻し、後ろに回転しながら地面に着地する。

翔太郎　「終わりだ」

そしてベルトを元に戻し、変身を解除し翔太郎は帽子を直す。
夷は倒れながら翔太郎の戦いぶりを見る。

夷　「やっぱすげぇよ、翔太郎」

翔太郎　「たく、お前はいつも背負いやがって！！」

翔太郎が怒鳴るが怒りだけでなく少しだけ夷をいたわる気持ちがあった。
夷は苦笑しながら……気絶した。

Wの探偵／二人で一人のライダー（後書き）

夷　「あんたらは？！」

？　「俺は仮面ライダーエターナル！」

それは一年前の出来事。

翔太郎　「ぐぁあああああああああああ！！」

フィリップ　「め、メモリが？！」

絶望の始まり、そして夷の始まり

夷　「なんで行くんだ！　死んじまうぞ！」

翔太郎　「このままにできるかよ！」

力を失ったW、恐怖に飲み込まれる夷

夷　「お、おや……っさん？」

おやっさん？　「さあ、お前の罪を数えろ」

再会する弟子と師

おやっさん？　「夷、お前は何のために戦う？」

夷　「戦う？　俺が」

おやっさん？　「そうだ、その強大な力をどう使う？」

かつての師との戦い、そして問い

夷　「俺は……知らねえよ、まだ戦う理由なんて！」

ＧＭ　「ＳＫＵＬＬ」

夷　「だけど、誰かが泣いてるなら俺が止める！」

初めての変身

夷　「変身！」

ＧＭ　「Ｓｋｕｌｌ」

おやっさん　「スカルか……」

スカルＶＳスカル

夷　「俺はもう振り返らない、だから……あんたの罪を数える！」

夷　「次回、ビギンズナイト」

夷　「俺の始まり、そしておやっさんとの決別……次回も見ないとマキシマムドライブだ！」

＝＝＝おまけ

夷　「てかもう過去話？！」

作者　「いや気絶したからちょうどいいし」

夷　「Ｗがすげー優遇されているけどな！」

作者　「仕方ない、これが終わればカブトを主役とした話書くから」

夷　「てか二つに分けるのか？」

作者　「流れ的にはスカルとのバトル、エターナル戦に乱入」

夷　「……それ俺、死ぬんじゃ？」

作者　「そうじゃなきゃ、エターナルをＧＥＴできない」

夷　「介入ポイントは？」

作者　「あれだ、翔太郎と照井さんがバイクで突入するときあるじゃん」

夷　「……あのときにか？！」

作者　「スカルボイルダーでな」

夷　「俺死ぬかも」

カメラ担当　「夷さーん、本番いきーます」

夷　「あー、はいはい」

以上舞台裏

ビギンズナイト（前書き）

えー、ここで謝罪させてください。

多数のユーザーの方に間違った感想を送ってしまったことにここに謝罪します。

しかしこれからも仮面ライダーW　赤き閃光と太陽の神をよろしくお願いします。

ビギンズナイト

夷　「暇だぁ～」

樹花　「そうだねえ～」

今は天道家のリビングで二人ともダラダラしていた。
ちなみに天道は食事処　天の道でシェフをしてるのでここにはいない、後は天道、夷、樹花の祖母である天道　アキヨも天の道にいる、というか天の道は元々アキヨが切り盛りしていた食事処であり天道はそこに強制的に働かせているのであった。
天道曰く、常連客ばかりで結構味にうるさいらしい。
完璧超人、天道総司も祖母だけには弱い……というよりも夷と二人がかりでも倒せてしまうのはどうなのだろうか、この頃の名言は「この頃はねっとって奴がすっごいねえ」だ。

夷　「ひまひまひままひま」

樹花　「って夷さん、今日バイトじゃ？」

夷　「ひよりねえが『今日は別のバイトがいるからいいよ』だってさ」

……このとき夷は想像していなかったがまさかそのバイト相手が戦友になるとはまったく考えていなかった。
そのとき夷の携帯である、スタッグフォンが鳴り出す。

夷　「翔太郎か？　なんだよ……ったく」

しかし、携帯を開き通話した瞬間、平和ボケした思考は吹き飛んだ。

夷　「な！！　テロリストだと？！」

翔太郎　「ああ、すまねえ。フィリップが拉致された」

そのまま夷は状況を聞く。

Ｔ２メモリと呼ばれる、新型メモリによる事件。
その後に風都に舞い降りた悪魔……仮面ライダーエターナルとの戦い、そして敗北。メモリが使えなくなり、フィリップが拉致されたこと、敵の目的は特殊兵器エクスビッカーによるＧＭからの解放。
そしてそのリーダー大道克己の過去、ＮＥＶＥＲの実態

夷　「ＮＥＶＥＲ……聞いたことがある、確か不死の傭兵とか言う、存在自体が非常識な連中だ」

翔太郎　「ああ、確かに強かったし……フィリップが拉致された、くそ！」

夷　「落ち着け！　くそ、スカルメモリは？！」

翔太郎　「ロストドライバーは使えるが……メモリは」

夷　「もういい、俺も風都に行く」

翔太郎　「無理だ！　お前が来ても！」

夷　「あほが！　誰が戦いに参加するって言った！　……サポートだよ、ギジメモリは何とか使えるみたいだしな」

翔太郎　「わか――ってお前は？！」

ザッ、と雑音が入り通話が切れる。
感じ的に襲われたのだろうけど夷は何もできない自分が悔しかった。
妹の樹花は心配そうに夷を見つめる。

樹花　「……行くの？」

夷　「ああ、行くぜ！」

そのまま玄関から外に出て、声を上げる。

夷　「スカルボイルダー！」

夷は自分のバイクの名を呼ぶ。
そしてどこかからバイクが走って夷の前に止まる。
夷はヘルメットをかぶりながらバイクを急発進させる。……ちなみに免許はない。

夷　「（警察に見つかんないように）」

そんなことを考えながら風都に向かう、夷の後姿を白い帽子をかぶり、白い服を着たかなりの風格がある男だった。その男は夷の姿が

視界から消えると……その場から消えた。

＝＝＝＝＝＝＝風都に到着

夷　「……ひどいな」

今の風都は夷からすると信じられないほど暗かった。
空の曇りもあるが、その町の雰囲気が暗かったが……一部の奴らはうるさかった。

市民１　「おい、これだよ！　メモリだろ！」

市民２　「ふざけんな！　これだろうが！　十億は俺のもんだ！」

二人の男たちがＧＭを持ちながらなにやら言い合う。
持っているのはミュージアムのメモリのようだが……夷は目を細めながら近づく。

夷　「十億ってどういうことだ？」

市民１　「知らねえのかよ！　あるガイアメモリをもってけば十億もらえるんだよ！」

市民２　「だからこれだろ？！」

夷　「ああ、そういうことか……てかそれミュージアムのメモリだろ？」

市民１　「いいんだよ！」

それ以上の会話はしないのか、また口論になる男たち、夷はあきれながらその場を立ち去る。
翔太郎からの情報が確かなら今のミュージアムのメモリは機能停止をしてるはずだ。

夷はまずは風都タワーに向かおうとするがスタッグフォンに着信が入る。
相手は……鳴海　荘吉。

夷　「は？！　嘘だ、おやっさんは……」

死んだはず、と夷の口から小さく零れる。
恐る恐る通話ボタンを押し、耳に携帯を当て、かけた相手に応答する。

夷　「も、もしもし」

？　「今すぐ鳴海探偵事務所に来い」

夷　「おやっさん？！　おやっさんだろ！　おい！」

しかし一言だけ言っただけで夷との通話を切るおやっさんと呼ばれた男。
その男は今は行方不明になっているが夷、翔太郎の師であり……憧れだった。

夷　「……行くしかないのか？」

そのまま風都の探偵事務所、鳴海探偵事務所に向かう夷。
期待と後悔が夷の心を蝕んでいく、それはあの時の光景、夷と師の絆が切れた瞬間。
銃で撃たれ、弱弱しく手を頭に持っていき帽子を外し夷の頭に乗せる、そして腰のロストドライバーを夷に装着させ、スカルのメモリを渡す。

おやっさん　『似合う（帽子が）男になれ、翔太郎、夷』

夷　『嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だぁあああああああああああああ！』

翔太郎　『おやっさん！』

あの時の光景が夷の頭にグルグルと廻りまわる。
後悔は何度もした、あそこで俺が死ねばと何度も思った。夷はそれが謝られると期待した反面、これが敵の罠なんじゃと思ってしまった。

しばらく走らせるととてもじゃないが大きいとは言えない探偵事務所が……夷のトラウマが見えてくる。
事実、夷は風都に何度も行ったが探偵事務所には足を運びたくなかった、夷は何度も思い出してしまうのだ、記憶が……。

最近ではそのおやっさんの娘と刑事が来て、少しは改善された。
そして探偵事務所の前にある人影が見えてくる。
白い帽子、白い服、夷はバイクから降りてその人影まで近づく。
夷　「久しぶりだな、おやっさん」
おやっさん　「……ああ」
夷　「つうか今までどこにいたんだ！　……今はいいか、早くフィリップを助けに行こう、おやっさん」
おやっさん？　「……お前は変わっていないな」
夷　「おやっさん？　……早く行こうぜ！」
夷は憤りを感じながら、おやっさんこと鳴海荘吉の手を握ろうとする。
しかし荘吉は手を引き、帽子で目を隠す。
そして腰に何かをつける……夷はそれを見て驚く。
夷　「ロスト……ドライバー」
荘吉　「……夷、お前は変わっていない。俺が死んだ後もな」
夷　「え？　は？」
荘吉　「……行くぞ、構えろ夷」
次の瞬間、荘吉の体が一瞬ぶれる。そして夷は本能で腕をクロスさ

せる。
するとちょうどクロスした腕の真ん中に荘吉の拳が突き刺さり、夷は足を一歩下げる。
夷は歯を食いしばりながら、荘吉に向かってパンチするがこれを受け流され、腹に膝蹴りをくらう。

夷　「ガッ！」

荘吉　「その程度か？」

夷は地面に叩きつけられ、肺から酸素を吐き出す。
荒い呼吸をしながら立ち上がる。そして右足を振り上げ上段から振り下ろす。
しかしそれを受け止める荘吉、予想していたのか夷は強引に掴まれている足を軸に回転し、左足を回し蹴りを叩きこもうとする。
しかし、足を離され体制が崩れたところで荘吉は腰を低くし掌底を夷に叩きこむ。
夷は5メートル以上吹き飛び、地面に転がる。夷と荘吉の差は歴然どころか圧倒的だった、一応は夷もあの鬼とはいかなくても少し弱い程度である、しかしそれを圧倒する荘吉は強者だった。

夷　「（なにも効かない……強すぎだろ）」

すると夷の目の前に何かが転がる。
それはロストドライバーだった、夷は弱弱しく手を伸ばす。

荘吉　「……夷、お前は何のために戦う？」

夷　「た、たかう？」

荘吉　「そうだ……お前のその強大な力をどう使う？」

力――それはずっと夷が追い求めた物、兄に追いつきたくて努力した、鬼になりたくて努力した、家族が守りたいから努力した。
夷は力が欲しかった、自分はあの人より弱いと――心の中ではそう思っていた。
強がっていた、兄より能力が劣り、ほかの鬼の弟子より弱く、兄弟子の気持ちに負けていた。

いつも学校で天才と呼ばれる夷だが……一つだけ足りないものがあった。
記憶だ、時々自分が何者かわからなくなる時があった。夷の目標にしている人たちは全員、自分と言う個性を持っていた。
しかし夷は……いやこの男は名前もない、家族もない、思い出がない。ないない尽くしだった。

結局のところ夷がＧＭの使用を拒否したのも自分と言う存在が信じられなかったから、つまり自身がなかったのだ。

夷　「俺は……強くない」

荘吉　「……そう思ってるのはお前だけだ、お前は強い」

夷　「違う、俺は……空っぽだよ、強くない。俺は……」

誰なんだ？　涙と共にその言葉がぽつりと零れる。
荘吉はじっと夷を……いや、名無しを見る。

荘吉　「ならここで死ね、このまま進んでも無駄だ」

ＧＭ　「ＳＫＵＬＬ」

ＧＭのボタンを押し、音声が流れる。
しかし夷は身動きをしない、できない、もうなんでもいい――俺なんて

荘吉　「……変身」

ＧＭ　「ＳＫＵＬＬ」

ロストドライバーにメモリが挿入され、横に倒される。
そしてＳの文字がドライバーに浮き上がり、風が起こる。そして荘吉の体が変化する。
基本カラーは黒・銀。頭蓋骨を模した顔を持つ、風都の守護者だった仮面ライダースカルが現れ、頭にＳの文字が刻まれる。それを隠すように帽子をかぶる荘吉。

荘吉　「さあ、お前の罪を数えろ」

夷　「数えあきたよ、そんなもん」

夷は目を閉じながら詫びた。自分の師に、家族に、先生に、仲間に、自分自身に。
スカルは手に専用の銃、スカルマグナムを持ち名無しの頭に向ける。
指がトリガーにかかる、もう少しで撃たれ名無しの頭ははじけ飛ぶだろう。
――それもいいかも、と名無しが思った瞬間、トリガーが引かれ、その銃口から光弾が発射された。

――そして名無しの頭を……粉砕しなかった。

突如飛来したＧＭによって守られたからである、夷は訝しげに眼を開けると、顔の目の前にＳの名を持つＧＭが地面に突き刺さっていた。

もちろんＴ２メモリだろうが名無しは手を伸ばし、そのメモリを掴む、そしてロストドライバーを腰につける。

名無し　「そうだよ、思い出した、思い出したよ」

名無しの記憶にある、夷が先生と呼び、心優しき鬼だった、あの人。

？　『怖いさ、怖いから俺は体を鍛え続けるんだ』

自分の兄であり、夷の目標である人

天道　『おばあちゃんが言ってた、力っていうものは人を狂わせる、けど持たなきゃいけないものだってな』

どこから来たかわからない、自分と同じく自分を探してる旅人？　『俺は通りすがりだけど、俺は門矢士って名前があるだけでもいいと思うぞ？』

名無し　「はっ、そうだよ、俺は俺だ！　夷だ、両希夷だ！」

荘吉　「もう一度聞こうか、お前は何のために戦う？」

夷　「俺は……知らねえよ、まだ戦う理由なんて！」

力強く断言する。さっきまでの無気力な男はいない、ここにいるのは夷、両希夷だ。

ほかの誰でもない、自分という存在を取り戻した。

夷　「だけど、誰かが泣いてるなら俺が止める！」

誰かは分からない、自分の記憶ですらないかもしれないが、記憶の中で誰かが泣いていた。

夷はそれが苛立たしかった。

夷は気付いていないかもしれないがそれが戦う理由だった。

そして夷はＧＭを手に持ちながら力強くボタンを押す。

ＧＭ　「ＳＫＵＬＬ」

ＧＭの音声が流れ、夷が目を静かに閉じる。

思い出すのはおやっさんの言葉……

荘吉　『覚えとけ夷、翔太郎、ガイアメモリは人の気持ちに大きく作用する』

荘吉　『自分の信念で変身しろ、そうすればきっとガイアメモリも答えてくれる』

憧れだった、目標だった、ともに肩を並べて戦いたかった。
しかし夷は踏み出す、もう彼は敵なのだから……目の前の敵を打ち倒すことを考える。

夷　「変身！」

ＧＭ　「ＳＫＵＬＬ」

そのとき、夷は泣いたのだろうか？　目には少し何かがたまっていた。
夷はドライバーにメモリを挿入し、横に倒す。

風が舞いおこる、夷の体にも変化が訪れる。

体は黒・銀のスーツのような物、頭は頭蓋骨を模した顔を持ち、首

にマフラーが巻かれる。
そして頭にSの文字が刻まれる、その姿は目の前の荘吉、仮面ライダースカルに瓜二つどころかまったくの同一の存在だった。

夷　「俺はもう振り返らない」

拳を握り、ファイティングポーズをとる夷。
黒い目はなぜか悲しみに満ちていた。
スカルマグナムを取り出し、右手に持つ。

夷　「今日であんたを越えてみせる」

スカルマグナムを自分と瓜二つのスカルに向ける。
それは過去への決別、そして越えてみせると言う意思表示。

夷　「さあ、お前の罪を……」

マグナムを持ちながらあのセリフを言う。

夷がこれからも言っていくであろうセリフ。

夷　「数えろぉおおおおおおおおおおおお！！」

叫びながら銃のトリガーを引き、撃っていく。
荘吉は帽子に手を当てながら少しだけ嬉しそうな声を出す。

荘吉　「坊主が……言ってくれるぜ」

そして荘吉もマグナムのトリガーを引き、光弾を放つ。
しかしその姿は……不謹慎だが親子喧嘩を見ているようだった。

夷はさっきよりも動きがいい、ダメージがないように見えるが結構ダメージがきていて気を抜けば倒れてしまいそうだった。

夷　「速攻で決めてやるぜ！」

荘吉　「坊主がよく言う！」

互いにマグナムを腰に戻し、肉弾戦に入る。
夷がこぶしを振るえば、荘吉が蹴りで受け止める。荘吉が回し蹴りを放てば、夷も回し蹴りで迎撃する。
互角の戦いだった。元々の戦闘能力もあり、覚悟を決めた夷の攻撃は予想以上に荘吉に届いていた。何度か打ち合った後、荘吉が体制を崩す。
そこに飛び蹴りを夷は打ち込み、まともにくらった荘吉が吹き飛ぶ。

荘吉　「が？！」

夷　「……うぉおおおおおおおおおおおおおお！」

そのままま体制の立ち直っていない荘吉に向かう夷。
気迫なら荘吉を凌駕していた、それに臆せず足に力を籠め、腰を落とし重心を安定させる。夷はそんなものは関係ないというのか、そのまま突っ込む。

夷　「おやっさぁあああああああああああああああああああああん！」

荘吉　「夷！」
二人の拳がお互いの顔に突き刺さる。
夷は走ってそのスピードをすべて余すことなくストレートに籠め、荘吉は腰を落とし、きちんとした重心移動で自分の体重をかけたス

トレート。
威力は互角、二人とも後方に転がる。
夷　「はあはあ、メモリ……ブレイクだ！」
荘吉　「ああ、決めるか。どちらが強いかを！」
二人は同時にメモリを抜き、腰のマキシマムスロットルにメモリを挿入し、ボタンを叩く。
そして全く同じ音声が流れる。
ＧＭ　「「ＳＫＵＬＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ」」
夷　「行きますか……ライダーキック！」
荘吉　「ライダーキックか……ふっ。ライダー……キック！」
風が両方のスカルから流れだし、足に向かって集まる。するとスカルの右足に紫色のエネルギーが纏わり右足を前に左足を後ろに、腰を落としながら力をためる。
二人の間に沈黙が訪れる、まったく身動きがない。
しかし二人ともまったく隙がない。
夷　「……」
荘吉　「……行くぞ」
夷は首を縦に振り、足を踏み出しジャンプする。
荘吉も同じようにジャンプし、右足を突き出す、そのまま足からの

エネルギーが右足を包む。
夷と荘吉の飛び蹴りがぶつかり合う。紫色のエネルギーがぶつかり、消えたりする。
地面があまりの衝撃でコンクリートがめくりあがる。

夷　「うぉおおお」

荘吉　「くぅううう」

徐々に夷が押し始める。
荘吉も抵抗するが夷はそれを見逃すわけなく、力を込める。
激しく右足が光だし荘吉の光を蹂躙し始める。

荘吉　「……だな」

夷　「あああああああああああああああああああ！！」

ついに蹴り負けた荘吉の体に夷の蹴りが完全に入る。
そしてマキシマムスロットルに挿入されたメモリが吐き出され、粉々に砕ける。

そして変身の解けた荘吉の体が地面に横たわる。

夷　「おやっさん！」

思わず着地した瞬間、荘吉に駆け寄る夷。
荘吉は笑いながら夷を見る。

荘吉　「負けたか……」

夷　「おやっさん?!」

すると荘吉の体が透け始める、まるで幽霊のようだった。
荘吉は帽子を外し、夷の頭にかぶせる。すっぽりとはまる感触に夷は驚きながらも懸命に荘吉を呼びかける。

夷　「なんで、なんで最後の攻撃を、わざと力抜いた!」

荘吉　「似合ってるじゃねえか、もう半熟は卒業だな」

夷　「答えろ!」

荘吉　「……お前の成長が見たかった、俺は娘の成長を見てやれなった。それが心残りだった、だがなぁ。お前と翔太郎は俺にとっちゃ、息子みたいな感じだった」

夷　「まさか、最初から?」

荘吉　「というよりも俺がここに入れるのももうすぐ終わりだ、その前に息子たちの成長が見たくてな」

言葉が紡がれていく瞬間にも荘吉の体は消えていく。
夷は泣きそうな声を上げながら変身を解除する。

荘吉　「おお、大きくなったなぁ」

夷　「バカ野郎、バカ野郎ぉおおおおおお!」

夷の目からあふれ出した涙が荘吉の体を濡らしていく。
それを目を細めながら眺める荘吉、まるで息子の成長に嬉しさを覚える親のような目だった。

荘吉　「そう泣くな、俺はいつでも見てる、いつまでもな」

夷　「おやっさん！　待ってくれよ、親父！」

荘吉　「親父かぁ、ははは、いい気分だな」

そしてもう体の大半が消えている荘吉は懐から何かを取り出す。
銀色のマキシマムスロットルによく似た何かだった。

荘吉　「ガイアメモリ強化アダプター、これがあればガイアメモリはさらに力を増すだろう」

夷　「そんなものはいらない！　消えないでくれ、おやっさん」

荘吉　「なら、ならだ！」

まだ消えていない手で夷の手を掴む。
力強い手の握りだった。

荘吉　「お前が今日から……二代目スカルだ」

夷　「……ああ、わかったよ」

夷は泣きながらうなづくと荘吉は満足そうに笑顔を夷に向ける。
晴れ晴れしい笑顔だった。

荘吉　「頑張れよ、息子よ」

その瞬間強い風が吹き、それと同時に荘吉が完全に消える。
夷は一度手を強く握ると思い切り叫ぶ。

夷　「あ、ああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

その場に残ったのは激しい戦闘跡と強化アダプターと呼ばれたものと一人の少年だった。

しかし夷は立ち上がった。遠隔操作でスカルボイルダーを呼ぶ。

夷　「今行くぜ、翔太郎、フィリップ！」

顔に涙が流れた跡がついていたが夷はそれを拭わずにバイクに乗る。
そしてハンドルを握り、一直線に風都タワーに向かう。
家族を助けるために……。

ビギンズナイト（後書き）

次回予告

これで決まりだ！

翔太郎　「相棒、そこは僕たちだろ？」

フィリップ　「ごめんごめん、そうだったね」

ついに再開する二人

克己　「いまさら数えきれるか！」

悪魔の再来

翔太郎　「行くぜ、フィリップ」

フィリップ　「ああ」

翔太郎＆フィリップ　「「変身」」

ＧＭ　「ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ」

復活のＷ

克己　「誰だ、お前は！」

夷　「俺か？　俺は……」

ＧＭ　「ＳＫＵＬＬ」

終結する事件

夷　「行くぜぇえええええええええええええ！」

ＧＭ　「ＳＫＵＬＬ　Ｕｐｇｒａｄｅ」

翔太郎＆フィリップ　「「風都の風が！」」

ＧＭ　「ＸＴＲＥＡＭ」

解放しろ、その力

翔太郎＆フィリップ＆夷　「「「さあ、お前の罪を数えろ！」」」

翔太郎　「次回、ＷとＳの力／託される力」

フィリップ　「次回も見てくれれないと」

ＧＭ　「ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ」

翔太郎＆フィリップ　「「マキシマムドライブだ！」」

お知らせ

申し訳ありませんが仮面ライダーＷ　赤き閃光と太陽の神はこれにて終了したいと思います。

読んでくれた方々、感想を書いてくれたマキサ様、青空様、ＪＯＫＥＲ様ありがとうございました。申し訳ありません、作者が諦めたという結果です、しかし新しくライダーの小説を書きました。仮面ライダーディケイド　もう一人の破壊者という物です、もしよければ読んでください。

改めて今まで応援してくれた方々、ありがとうございました。次の小説もよろしくお願いします。
それではちぇりお！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3193u/

仮面ライダーＷ　赤き閃光と太陽の神

2011年10月8日23時33分発行